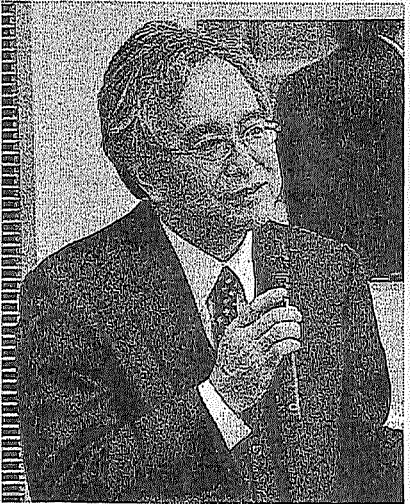


医療情報データベース化がもたらす可能性や課題について講演した大江教授



## ICTで医療変化も

弘大  
COI事業 大江教授(東大大学院)講演

弘前大学は16日、県、民間企業と連携して認知症や生活習慣病の予兆発見と予防法開発に取り組むプロジェクトの研究拠点「COI研究推進機構」事業の一環として特別講演会を弘前市本町の同大学院医学研究科臨床大講義室で開いた。

16回目の今回は、東京大学大学院医学系研究科社会医学専攻医療情報経済学分野の大江和彦教授が「医療を変えるICTと医療情報データベース〜夢と課

題〜」と題し講演した。

この中で情報・通信技術を活用した医療情報の可視化が、患者の病状変化の予測などに重要な役割を果たすとした。具体例に血糖や運動、食生活の自己管理を支援するスマートフォン用のシステムを挙げ、モバイル端末や体や衣服に身に付ける情報機器ウェアラブル端末の普及が「新たな治療薬になり得る」と述べた。

また、開発会社で異なる電子カルテシステムを標準化したデータベースが全国的に普及しつつあることを紹介。このうち100万人の糖尿病症例の登録を目指すデータベースの完成が間近で、情報の蓄積が始まりつつあると話した。

(石田紅子)